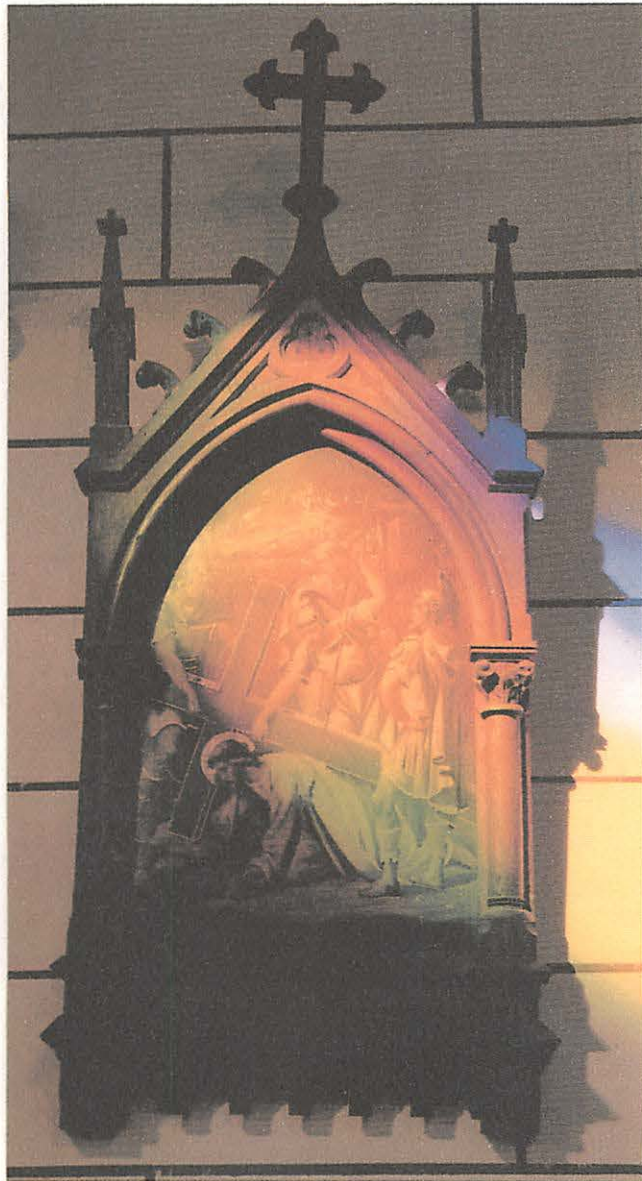


聖ザビエル天主堂

# 『十字架の道行き』

*"Via Crucis"*

*The Lord's Path of Suffering*



## 教会内装画としての 「十字架の道行き」

稲賀 繁美

現在博物館明治村に保存されている、元四条河原町教会、聖ザビエル天主堂の内陣は、14枚の真鍮パネル油彩絵画によって飾られている。現在までの時点では、これを制作した画家の署名も素性も国籍も流派も判明せず、この連作の発注、来歴に関する資料も発見されていない。したがって、この点は宿題として、将来四条河原町教会のご協力をも仰ぎ、さらに調査を継続してゆきたい。

右のような状況のため、本稿では、西欧美術史の流れのなかで、「十字架の道行き」という主題がどのように扱われて来たかを簡単に復習し、本連作のおおまかな歴史的位置付けを確認するに留めたい。

\*

十字架の道行きは、イエズスがエルサレムでピラトから死罪の判決を言い渡され、鞭打たれ、茨の冠を頭に巻かれた後、市外にあるゴルゴタの岡（カルヴァリオ）まで刑吏に引き立てられながら十字架を背負って歩かれたという故事に由来する。その「受難」の光景はキリスト教徒ではない日本人にも、例えば映画「ベンハー」などで親しいものとなっているだろう。もっともこの故事が歴史上の史実であった確証があるわけではなく、神話学者たちは、『詩篇』(22, 69)に基づいて福音書記者たちが『旧約』の預言の成就を「演出」してみせたものと推定している。いうまでもなく、いまわの際のイエズスが十字架上で発したとされる言葉、「わが神、わが神、何ぞわれを捨て給いしや」は、この『詩篇』22にみられる文句そのままである。

この道行きはしかし初期キリスト教会では、まだ規格化された一連の図像とはなっていなかった。たしかにイエズスが十字架（教会の象徴）を担う姿はビザンティン教会においても、また西方カトリック教会においても存在していたが、そこに劇的な「受難」の表現は与えられていない。図像が大きく変貌するのは、フランシスコ会が「十字架の道」の守護を命ぜられ、イエズス・キリストがエルサレムで十字架を担って迎ったとされる道筋への帰依がヨーロッパに広まった中世末のことである。イエズスの足取りを辿るために、聖地エルサレムの聖墓教会とその所轄になるゴルゴタの岡を目指し、そのご利益に与かろうとする、民衆的な巡礼熱の高まりが、その背景にある。



第二留 〈十字架を負う〉



第三留 〈最初のつまずき〉



第四留 〈聖母に会う〉

\* 第一留は14頁参照



第五留 〈シモンに助けられる〉



第六留 〈ヴェロニカ聖顔を拭う〉



第七留 〈再びつまずく〉



第八留 〈エルサレムの女達を慰む〉

道行きの具体的な場面が明瞭に定義されてくるのも、こうした民衆信仰と呼応した現象である。イエズスが苦痛に耐えられず、途中で立ち止まったとされる場面の有り様は、偽ボナヴェントゥラや聖女ブリジッドのような神秘家たちの想像力で臨場感ゆたかに再生された。これらの「留」は、聖史劇の演出に格好の活人画の場面を提供したばかりか、実際に聖堂の身廊や、屋外の路傍や傾斜地などに設営されて、信者たちの礼拝の場所となる。有名なものとしては、たとえばピエモンテのヴァラルロの「十字架の道」やニュルンベルクの聖ヨハネ教会への途上に1490年に設置されたアダム・クラフトの木彫による十字架の道などがある。また1750年にはローマ教皇がコロッセウムの内部に十字架の道を建築しようと意図したことが知られている。ラテラノのスカラ・サンタでは、信者たちが膝まづいてキリストの道行きを辿り、「留」ごとに祈りを唱えるが、こうした風習はスペイン・アンダルシア地方の聖週間（セマーナ・サンタ）の行事などにも残存し、また聖地イエルサレムの巡礼などでは今日も時として見られる光景である。

\*

このように十字架の道行きへの信仰が定着するにつれ、それぞれの「留」にふさわしい画像が画家たちに発注されて、図像も確定されてゆくこととなる。それは元来聖なる数である七つの場面から成り立っていた。例えば(1)キリストが十字架を担う場面 (2)キリストが初めて倒れる場面 (3)キリストが聖母に会う場面 (4)キリストが再度倒れる場面 (5)聖女ヴェロニカがヴェールでキリストの顔の汗を拭う場面 (6)キリストが三度倒れる場面 (7)キリストの埋葬、である。これら七つの場面には、さらに追加がなされ、1590年にケルンで発行された『聖なる地の演劇』では、シモンの助けを受けるイエズス、死刑の宣告を受けるイエズス、エルサレムの婦人たちを慰めるイエズス、衣を剥がれるイエズス、十字架に釘付けにされるイエズス、磔刑のイエズスの五場面が加わり、埋葬を除く十二場面



第九留 〈三たびつまずく〉



第十留 〈衣を剥がされる〉



第十一留 〈十字架に釘づけされる〉



第十二留 〈十字架上に息絶す〉



第十三留 〈十字架より降ろされる〉

\* 第十四留は10頁の図40を参照

が記載されている。一説では、後に1625年になってスペインのフランシスコ会士ダザが、独立した主題であった最後のふたつの場面、つまり十字架降下およびキリストの埋葬を十字架の道行きに付け加え、十四の場面が定着したという。

そのなかで、幾つかの図像に注釈を加えておこう。例えば、河原町教会の作品の場合、その第五留には、シレネ（現在のリビア東部に属する地中海沿岸地方）のシモンの助けを受けるイエズスの図像があるが、これは、共観福音書（マルコ、マタイ、ルカ）には見えるが、ヨハネ福音書には見えない記事である。ビザンティン教会の図像ではシモンが登場するのが慣例だが、西方教会の作例では、場合によっては省かれ、またたんにイエズスに手を貸すだけの姿で描かれもする。

また聖女ヴェロニカ伝説にも、ここで言及しておこう。キリストの汗を拭った布には、その聖顔の跡がくっきりと残ったといい、この献身的な女性の名前も「真の聖画像」を意味する vera icona に由来する。この伝説は聖史劇に起源をもち、想像上の聖女ヴェロニカ伝説も十五世紀以降広まったものだが、現在ローマのサン・ピエトロ大聖堂には、この時の「聖顔布」と称する布が、聖遺物として保存されている。

\*

今回、河原町教会聖サビエル天主堂で最初に修復された作品は、最初の場面、すなわちピラトから死刑の宣告を受けるイエズスである。背景の部分は痛みが激しく、何か描かれていたかあまり判然としない。人物像はやや生硬な表現だが、当時の西欧アカデミー絵画の基本に則った、ほとんどグリザイユに近い、色彩を押しえたデッサンとなっている。衣服の襞に加えられた金箔押しが、単彩に近い画面にアクセントを与えており、その技術には確かな職人芸が認められる。十九世紀末当時、ドイツのボイレン修道院を中心とした画僧たちが、十字架の道行きを主題として頻繁に取り上げていたことも想起される。

なおこの河原町教会の場合、創建当初は、側廊と身廊との間の部分は支柱の周囲に畳を敷いていたらしい跡がうかがわれ、十四枚の画像をひとつひとつ辿りながら礼拝をした様子を彷彿とさせる。現在の図像の配列から推定すれば、まず祭壇脇左奥まで進み、そこからひとつずつ教会前室の側へと後退しつつ礼拝し（第一留―第七留）、つぎに右翼にまわって、今度は手前からひとつずつ祭壇の側に向かって近づきつつ礼拝したらしいことが分かる（第八留―第十四留）。できれば将来、そうした創建当時の内装を復元して展示する機会にも恵まれることを切望したい。

なお、本稿執筆にあたって、資料調査などで名古屋大学助教授木保元氏のお手を煩わせました。記して謝意を表します。

（いなが しげみ・三重大学人文学部助教授）

## 編集後記

聖ザビエル天主堂の建築について御執筆いただいた西尾雅敏氏は、それぞれが明治を代表する建築物の保存に日夜心をいたため、いつ訪問しても、明治村のどこかの建物の修理にかかわっておられる。

尾藤正樹氏が制作販売されている「銅箔キャンパス」について電話を下された時、私は14点の油彩画は銅板に描かれていると思っていたので、剥落の様子を話題にした。するとさっそく尾藤氏は明治村に同行され、さらに支持体の分析をお引き受け下さった。日本鋳業株式会社倉見工場のご協力による分析結果は今回寄せてくださった原稿の文中に明らかである。

稲賀繁美氏に、美術史からの視点で天主堂内の14点の連作について書いていただくことになったのは、明治美術研究学会でお隣りに坐ったのがきっかけであった。私がお見せした写真に興味を示されたことを後悔なされないようお願いしている。

宮田順一氏には、東京芸術大学の保存科学研究室に在籍されていた当時から、教えていただく事が多かった。絵画のみならずあらゆる映像全般に対して関心を持ち、客観的に絵画の組成を観察し調査分析される宮田氏は、修復家にとって貴重な存在である。今回も本当に惜しみ無い協力をいただいた。

編集については三好寛佳氏の協力を得た。専門家の全面協力に支えられて安心して仕事を進めることができた。『絵画修復報告』はこれからも出版を重ねたいと思っている。ここに『第1号』と『第2号』は、'久さ'は音ひである。

今回の出版に助力をいただいた皆様に心からの感謝を捧げる。

(M.Y.)

山領絵画修復工房：1970年設立。油彩画・版画・素描の保存修復および技術者養成

修復担当：井上涼子、Gleason菜穂子、斎藤 敦、多田 智、星野喜一、前田留実、牧野Vera、森 京子

事務担当：種田節子

### 絵画修復報告 No.1

発行日 1992年 5月25日  
発行人 山領まり  
発行所 山領絵画修復工房  
〒180 東京都武蔵野市境南町5-6-18  
電話 0422(31)7381 FAX 0422(31)7396  
製作 三好企画  
印刷 凸版印刷株式会社